

# 郷土博物館・文学館だより



展示室風景

現在、当館では3月21日(月・祝)まで企画展「島尾敏雄と奥野健男」を開催しています。



奥野(左)と島尾(右)

## 企画展

# 「島尾敏雄と奥野健男

## — 作家と文芸評論家の交流 — 開催中

生涯を渋谷区で過ごした文芸評論家・奥野健男は、作家・島尾敏雄のファンであることを公言し、島尾作品を高く評価していました。二人の交流は公私にわたりますが、そこには、評論家と作家が互いに交流し、刺激しあいながら、文学作品が世に生み出された「時代」の空気が流れています。

本展では、奥野健男が所蔵していた資料の中から、『夢の中での日常』『出発は遂に訪れず』『死の棘』『琉球弧の視点から』などの島尾作品とともに、二人の関係を示す写真や書簡などを紹介しています。



展示解説風景

## 忠犬ハチ公 — いとしや老犬物語 —

渋谷駅前に立つ忠犬ハチ公像は、待ち合わせ場所の定番です。このハチ公の物語は戦前より新聞や教科書に載るなどし、有名でしたが、記憶に新しい所では、昭和62年(1987)に「ハチ公物語」として映画化され、平成21年(2009)にはハリウッドで、リメイク版が制作公開され、話題となりました。ハチ公の物語は世代を超え、今や世界にまで知られています。

ハチ公は大正12年(1923)11月秋田県大館市大子内で生まれた秋田犬です。生後50日前後で、純系の日本犬を捜していた東京帝国大学農学部教授の上野英三郎教授に貰われてきました。上野博士はハチと名づけ大変かわいがり、幼犬のうちは自分の布団に寝かせたといいます。やがて成長したハチは上野博士の送り迎えをするようになります。上野博士の家は現在の東急百貨店本店の裏付近にあり、そこから駅までの道をハチは朝は駅まで送り、夕方は駅で博士の帰りを待ち、共に家までもどりました。

しかし、上野博士は大正14年5月21日急逝します。享年54でした。主人を失ったハチ公の境遇は一変し、飼い主も何人か変わりました。

ハチ公が世間に知られるようになったのは昭和7年10月に朝日新聞に「いとしや老犬物語」という記事で、亡き主人を待ち続ける犬として紹介されたことによります。

この記事を投稿した斉藤弘吉氏が著した『日本の犬と狼』によれば、「ハチ公はおとなしい性格であるため、新しい首輪をするとすぐに人間に盗み取られてしまった」そうです。また、駅員や露天の店主に追い払われたり、殴られたり

もしました。ある時にはいたすらされ、墨で眼鏡と八の字髭を書かれたそうです。

そのため斉藤氏は、ハチの悲しい事情を広く知ってもらうため、新聞に投稿したといえます。

新聞に取りあげられてからは、皆ハチに親切になり、やがて恩を忘れない犬として、有名になったハチ公の銅像建設の気運が高まり、昭和9年4月2日銅像の除幕式が行われました。

しかし、昭和10年3月8日、ハチ公は渋谷駅から離れ、渋谷川にかかる稲荷橋付近で冷たくなって発見されました。13年の生涯でした。

駅前に建てられたハチ公像にも悲しい別れが待っていました。像建立より10年たった昭和19年10月12日、太平洋戦争中の物資不足から、ハチ公像は供出されてしまいました。実はハチ公像は同じ鋳型からもう1体作られ、ハチ公の故郷秋田県大館に建てられていました。ただ、この像も同じ頃供出され、溶かされました。

現在渋谷駅前にある像は、戦後再建の声が高まり昭和23年8月15日に建てられた像です。

上野博士が亡くなってから90年近くたった今でも、ハチ公は銅像に姿を変え、渋谷駅前博士を待つかのようにたたずんでいます。



生前のハチ公



初代ハチ公像(安藤照作)



## 島尾敏雄・奥野健男・吉行淳之介

文芸評論家・奥野健男は、生涯にわたって、作家・島尾敏雄にエールを送り続けました。奥野はなぜ、それほどまでに島尾に心を寄せたのでしょうか。評論家の立場からいえば、島尾文学に日本の戦後文学の新たな方向性を具体的に見出したことでした。しかし、強いにせもの意識や自己否定感にさいなまれていた島尾に対し、奥野は個人的にもいたわりの気持ちを抱いていたことが島尾の日記などからわかります。

島尾と奥野の関係を理解していた作家・吉行淳之介は「奥野の惚れこんだ作家は、太宰治と島尾敏雄の二人で、その頑ななまでの惚れ込み方は見事である」（『見事な頑なさ』『奥野健男作家論集』第2巻 昭和52年 泰流社 付録「月報5」）と述べ、また「昭和20年代の島尾敏雄の文学に、私ははやくも感応したが、支持者は狭い範囲にしかいなかった。奥野健男はその1人で、島尾文学を支持し、以来20数年支持しつづけている。これは立派だ」と書いています。さらに島尾作品に関しては「自分と生理が近い」（『近代文学』昭和37年2月号）という感想をもらしています。

ところで、昭和39年5月、九州大学で開催された島尾と奥野の講演に吉行は同行しています。吉行は「島尾が九州の福岡まで出てくるから会いに行かないか、と奥野に誘われた。二人は九州大学での講演の用事があり、私はなにも用事はなかったが、十年ぶりの島尾が懐しくて行くことにした。この時の福岡での、二日間は、

とても愉しかった……」（前掲「見事な頑なさ」と書いています。

島尾も奥野への手紙にも「夜を徹して話をしたり、とてもたのしかった。また貴兄のご親切があとあとまでなつかしく残っています。時期が別のときであつたら、いっしょに長崎、天草も廻れたものと心残りです」とあります。

奥野は「吉行淳之介と島尾敏雄」と題する原稿に「ぼくと奄美にいる島尾とが一緒に九大で講演するのを知って、吉行は自分は何の用もないのに、島尾のいる博多のホテルへ、夜の日航便で駆けつけて来た。（中略）島尾に何か事件が起ると、いや上京しただけで吉行はぼくに電話を掛けてくる。吉行に何か異変があると島尾がぼくに電話で聞いてくる。そこに吉本隆明や庄野潤三が加わることもある。こんなに奥底まで緊密な文学仲間の関係はもう成立することはないであろう」と記しています。当時の文壇の交流がしのばれる一文ではないでしょうか。



昭和39年5月 島尾（右）と奥野（左）の九大講演会に同行した吉行淳之介（中）

## 収蔵資料紹介

### 「玉川家庭園屏風」



ここで紹介する六曲一双の屏風は、広尾にあった旧家、玉川家の庭園の様子を伝える屏風です。明治五年（一八七二）、当家の金三郎の所望により、歌川（安藤）広重の孫である安藤広近が描きました。

この玉川家は、『江戸名所図会』の挿絵でも大きく取り上げられています。それほどこの家が有名であったことこの理由の一つに、將軍徳川吉宗が、鷹狩りの途中でこの家に立ち寄って休息し、そのため同家の赤門を御成門と称した、という言い伝えがあるからです。当時の広尾の西方には、「広尾原」とも呼ばれた広い野原があり、何度か將軍の鷹狩りが行われたといわれています。

戸名所図会』に描かれた玉川家の挿絵には、「広尾水車（ひろをみずぐるま）」のタイトルが付けられています。

写真の屏風では、水車小屋は右方の奥にぼんやりと描かれているだけですが、水車があったことを示す施設がみられます。それは水車を回すための小さな水路（母屋の前）と、その引水のために渋谷川に造られた大きな堰（左方）です。せき止められた水によって川には滝ができています。

江戸時代から明治時代にかけて、渋谷ではいたるところで水車の回る風景がみられましたが、残っている写真はなく、絵画もそれほど多くはありません。この屏風は当時の付近の様子がわかるだけでなく、渋谷の代表的な産業である水車業に関する貴重な資料ともなっています。

#### 【今後の展示予定】

##### 企画展「島尾敏雄と奥野健男

—作家と文芸評論家の交流—

開催中 平成23年3月21日（月・祝）まで

##### 「渋谷現代短歌優秀品作展示」

平成23年4月2日（土）～4月17日（日）

\*第11回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

##### 企画展「渋谷のむかし写真展シリーズ」第12回

平成23年4月23日（上）～6月12日（日）

##### 企画展「新収蔵資料展」

平成23年6月18日（土）～7月31日（日）

#### 白根記念

#### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円（80円） 小中学生:50円（40円）

※ 60歳以上の方、障がいのある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.16

平成23年3月1日発行